

第78回企画コーナー展
真澄の歩いた道
すすきの出湯



平成31年 3月16日(土) ~ 令和元年 5月12日(日)

1 白糸の滝へ、再び

北秋田市森吉

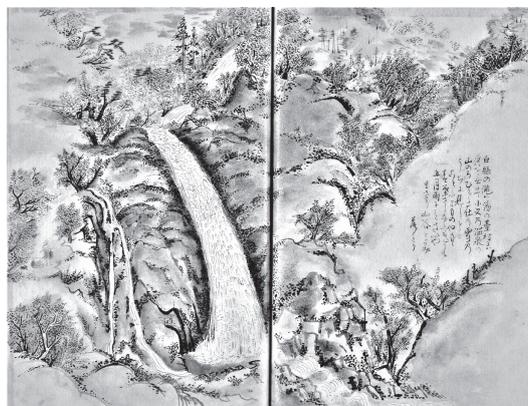
享和三年五月、真澄は、現在の大館市比内町扇田に滞在していました。そこに医師の武田成親（敬夫）が訪ねてきて、「白糸の滝を見に行かないか」と真澄を誘います。実はその前年の享和二年十二月、真澄は厳冬の山中を難渋しながら、現在の北秋田市森吉にある白糸の滝を目指して歩いた経緯がありました。「昨年は、雪のせいで十分に見られなかった。もう一度白糸の滝を見たい」との思いに駆られ、真澄は成親と共に出発します。

菅江真澄は、享和元年（一八〇一）から文化四年（一八〇七）頃までの間、現在の県北部の能代山本・大館北秋田・鹿角の各地域に滞在し、様々なところを巡っています。その間、多くの日記を書き残しています。

『すすきの出湯』は享和三年（一八〇三）の一月～五月末（閏一月を含む）の六ヶ月間の日記です。大館市大滝温泉を拠点としながら、同市十二所にも足を伸ばして約五ヶ月間を過ごします。五月には大館市比内から北秋田市森吉山麓にある白糸の滝を目指します。真澄はその土地に古くから伝えられてきた歴史、文化、習俗などを詳しく記録しています。現代ではすでに失われ、忘れ去られたものもあります。真澄の記録を通して、改めてふるさと秋田の魅力を感じて頂ければと思います。

実は真澄が白糸の滝を目指すのには、もう一つ別の目的があったようです。「硯」の原料となる石の採取です。前年訪れた際の日記『雪の秋田根』には、「硯台」というところがあった、多く石材がでる。非常に珍しいもので、楓やぶな、かしわ葉などの花紋石がある。（中略）しかし、雪の中に埋もれているのでとることもできず、今はむなしく眺めるばかりである」と記しています。花紋石とは、植物の化石を含んだ硬質黒色泥岩のことで、別名、木の葉石といえます。『森吉町史資料編 第七集 木葉硯』によると、現在でも白糸の滝の上流周辺には、俗に硯の沢と呼ばれる場所があり、硯の原料になる石が見られるようです。

文人である真澄は、この地で採れる珍しい硯石に対して大きな関心があったのでしよう。前回果たせなかつた硯石採取を、今回こそはと願う真澄でしたが、真澄が滝に到着した前後数日間、生憎の雨で水かさが増しており、残念ながら真澄は、今回もまた硯石を手に入れることはできませんでした。



白糸の滝
『すすきの出湯』館蔵写本



木の葉石硯 館蔵
上部に木の葉の化石がある。

2 菅笠と金山の話

大館市比内

農閑期に女性が行う農家の副業でした。真澄の日記原文では「朝顔むかふ鏡笠、岸の柳の風ふくれ、来寄る波笠うち重ね、冬の歩路の雪おろしは名さへ涼しげに」などのように、七五調のリズムに乗せて、その種類の多さについて紹介しています。（あさがお・鏡・ふくれ・なみ・雪おろしなどは、それぞれ笠の名称、種類の多さからも盛んな産業であったことが窺えます。）

また真澄は、白糸の滝から扇田に戻る道中で大葛金山に立ち寄っています。日記には「鉱山の支配人である荒河富訓という人に会った」とあり、その計らいで鉱山内にある役所に泊めてもらったり、鉱山各所を見て様々な話を聞いたりすることができたようです。

日記内では鉱山の支配人を「荒河」氏と表記していますが、『比内町史』によると、安永八年（一七七九）から明治三年（一八七〇）までの約九十年間、鉱山の支配人は代々「荒谷」家が務めたため、おそらく真澄の勘違いであろうと思います。真澄が会った人物は荒谷家第十一代当主 荒谷忠右衛門富訓、その人だっただけではないかと思われまます。

江戸時代前期の秋田藩における鉱業生産の主は、院内銀山に代表されるように銀でしたが、金山として、阿仁や杉沢（旧西仙北町、小杉沢とも）、そして大葛が隆盛を誇りました。当然、多くの人々が働き、人の数だけ物語も生まれます。鉱夫と鉱山主の関係性がよく表された滑稽話や、仕事上、短命になつてしまふ鉱夫を夫に持つ妻の悲話など、真澄は大葛金山にまつわる様々な話を日記に書き留めています。



大滝温泉薬師堂のすずき
『すずきの出湯』館蔵写本

享和三年一月一日、真澄は現在の大館市大滝温泉で新年を迎えます。日記のタイトル『すずきの出湯』とは、大滝温泉のことです。「大滝温泉の湯元である薬師堂を訪れると、出湯が湧き出るところに板をしき、土をのせ、すずきを一もと植えてあり、それがもう芽ぐんでいた。その由来を尋ねると、遠い昔、不思議な老人が卵の殻に湯をつめ、これをすずきの苞につつんで、ここに捨てていった。それ以来ここに温泉が湧き始めた。それで、こうしてすずきを植えるようになったと伝えられており、この温泉をすずきの出湯とか、たまごの湯と言うようになった、という」と真澄は記しています。また日記中の図絵には、すずきの花が穂波をなびかせる様子を描いています。しかし、よくよく考えると季節は一月です。花が咲いているのはおかしいと思われるかも知れませんが、実はこれは、真澄自身が図絵の傍らにわざわざ「秋見し画」と書いているように、以前見たことがあったものを

思い出して描いています。いずれ、日記のタイトルを『すずきの出湯』としたのは、そこで見たすずきに趣があり、真澄の印象に強く残ったからでしょう。

大滝温泉や近隣の十二所で、真澄は人々が賑やかに正月・小正月を過ごす様子を目にし、日記に詳しく書き記しています。

▼大騒ぎの一夜

二月八日は、大滝温泉の湯の神を祀る日である。そのため前夜、一月七日の夜から日待ちをする。村長の家に大勢集まり、どんづく、たからびき、六半といったばくちをする」と真澄は日記に記しています。日待ちとは、徹夜で朝を待つということ、その間、普段は掟で禁じられている博打をして大騒ぎをしたようです。そもそも、皆を戒める立場であるはずの村長の家で行っている時点でおかしな話ですが、正月の今日ばかりは、村長も見逃すのでしよう。

様々な博打をしたようですが、真澄が「たからびき」と表記した博打は、「宝引」と呼ばれる博打のことを指すと考えられます。『大館市史』によると、「ボウビキは主に女の人の遊びだった。集まった人数分の麻縄を用意し、その一本にタマクラをつける。タマクラとは鎌や鉈の柄にはめておく金の輪で、胴元はそれがついている縄を人に知られぬように座に出す。それぞれが縄を引き、タマクラがついた縄を引き当てた人に金が渡る」という博打でした。『鹿角市史』や『比内町史』にも同様の記述があり、女性に限らず、男性が行う場合もあったようです。真澄が世話に

なっていた村長宅にも男女関係なく、大勢の人が集まっていたかもしれませぬ。

さて、真澄もこの博打に参加したのでしょか。日記には「おなじ宿の奥ふかうふしたれば、夜もすがら耳にたちて、ともに居あかしたるにひとしかりき」とあります。どうやら真澄は博打には参加しなかったようです。ただ、床についたものの、人々の賑やかな声が聞こえて、眠りにはつけず、一緒に徹夜したのと同じようなものであった、ということだったようです。村の人々にとっては年に一度の一大イベントであり、日頃の厳しい労働を束の間忘れることができる、最大の楽しみであったのでしよう。



宝引用具 鹿角市・個人蔵

昭和50年代から実際に使われてきた宝引用具。
当たりの縄には五円玉の束が付けられている。

ら大勢の人が集まって、十二所で行う、かまくらやくの祝いを見物に出かけて行った。(中略) 秋の落葉をかき集めて俵につめ、火をつけて盛んに振り回すと、雪の上に紅葉が散るように火花が散った。まばゆいばかりの光景は、風情があった」と記しています。

十二所の火振りかまくらに関しては、近年まではすっかり途絶えていて、そのような行事があったことを知る地元の人には皆無であったようです。古老に聞いても昭和初期にはもう行われていなかったといえます。しかし、真澄の記録をもとに、平成二十三年から「十二所かまくらやき」の名称で、地元有志の方々がこの行事を復活させ、現在は冬の小正月行事として地元住民に親しまれています。

真澄も記述していますが、火振りかまくらは左義長の一種であり、厄を祓い、無病息災や家内安全を願うものでした。「十二所かまくらやき」のように、一時は失われ、忘れられていた行事が、真澄の記録をきっかけに再び行われるようになり、地域の人たちに親しまれているというのは、真澄にとっても記録を残した甲斐がある、といったところではないでしょうか。

▼十二所かまくらやき

県内で「火振りかまくら」と言えば、仙北市角館が有名です。しかし、真澄はその火振りかまくらを享和三年一月十四日、現在の大館市十二所で見えています。日記には「夕方か



十二所かまくらやき
夏井雅人氏撮影 2018/2/14

第79回企画コーナー展

Letter from 真澄

-真澄からの便り-



令和元年

7月6日(土) ~ 8月25日(日)

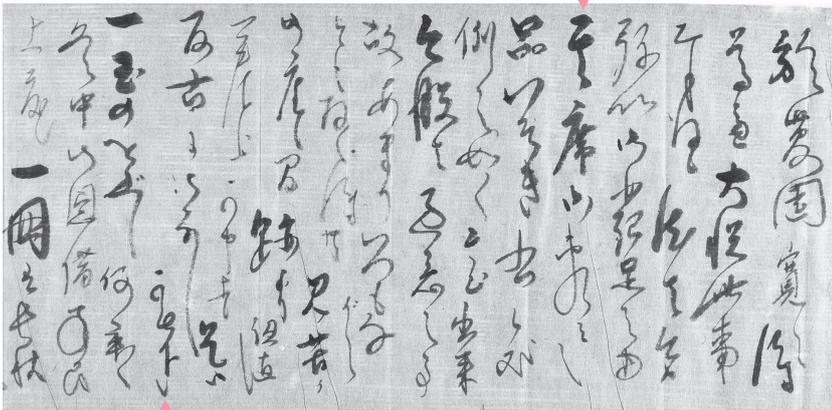
真澄の日記や地誌などは、公を意識して書かれており、真澄個人の心情を直接的に表している箇所は、それほど多くありません。一方で、真澄が親しい人に宛てた書簡からは、飾らないありのままの真澄の私的な心情を感じ取ることができます。

「便り」という言葉を辞書で引くと「頼りと同源」とあります。日々、旅の中に生きた真澄にとって「便り」を出す相手は、文字通り異郷の地で「頼り」にした存在であったのでしょうか。信頼する相手だからこそ、心置きなく伝えることができた内容がそこには書かれています。

真澄自筆の書簡資料を元に、そこから垣間見える、飾らないありのままの真澄の人物像に思いを巡らせてみてください。

1 生真面目な真澄

真澄の人物像を考えた時に、「生真面目」という言葉が思い浮かばないでしょうか。日記や地誌の書きぶりなどから類推されるイメージではないかと思いますが、真澄が友人、大友直枝【保呂羽山波字志別神社（現横手市大森町）の社家である大友家の嫡子。藩校明徳館の和学方で教鞭を執った人物】に宛てた書簡の中に、その生真面目さを物語るエピソードがあります。



文化13年(1816)10月20日付 大友直枝宛書簡(部分)【個人蔵】

翻刻

其席御頼^レ之
品いそぎ書候処、
例之如く悪出来、
今般は過急之事
故あまりいつもながら
とも存候得共、見苦^ッ
御座候間、跡より認直し
差上可申上候。是は
復古に御なし可被下候。

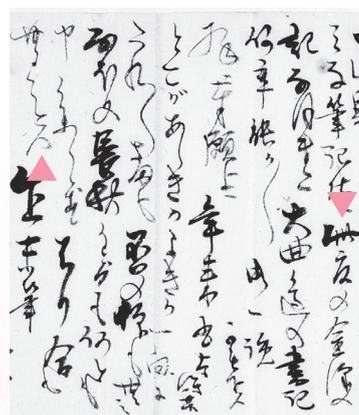
意訳

以前会った際に頼まれた書き物についてですが、急いで書き上げました。ただ、いつもながらのことかもしれません、出来が悪いのです。今回は慌ただしかったこともあって、いつもながらとは言え、大変見苦しい出来になっておりますので、後ほど書き直しまして再度差し上げたく思います。今回お贈りしたものはお捨てになってください。

真澄自らが直枝に贈った書の出来が気に入らず、書き直させて欲しい旨を書簡に書いています。「例之如く悪出来」とは、真澄の謙遜でしょうが、いずれ人に贈る物であれば、自ら納得したものを贈りたいと考える、真澄の「生真面目な」人柄を窺い知ることができ

2 愚痴をこぼす真澄

日記や地誌の中に、喜怒哀楽といった自身の感情を表すような内容は、ほとんど書かない真澄ですが、親しい友に宛てた書簡の中では、少々感情的になって愚痴をこぼすこともあったようです。



文政8年(1825)10月9日付 高階貞房宛書簡(部分)【館蔵】

翻刻

此度の金沢の

記、なほまた大曲辺の書記
何卒能く御一覽可被下候
様奉願上候。年来書上候得共、
どこがあしきかよきか一向に
たれくさまざま否の仰も無之、
なほ又長秋主よりも何とも
申参らず、はり合も
無之候。

意 訳

このたびの金沢や大曲辺りの記録を何卒よくご覧頂きたくお願い申し上げます。ここ数年書き上げてきた地誌ではありますが、どこが悪くてどこがよいのか一向に誰も言ってくれません。(鳥屋) 長秋(久保田(現秋田市)の町人。生来の向学心から古典を読み、歌を詠むなどした。真澄の死後、その墓碑を建立するために尽力した人物)でさえも何も言わず、張り合いがありません。

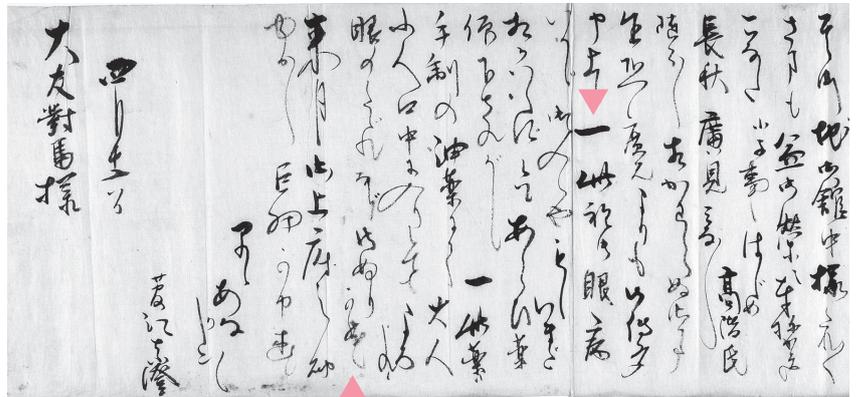
自身が作成した地誌について、誰も評価してくれないことへの不満と不安を、友人であり、真澄と秋田藩との橋渡し役でもあった高階貞房【秋田藩士。本居大平門下で国学を学び、九代藩主佐竹義和の代には大小姓、十代義厚の代には目付を務めた人物】に宛てた書簡にて切々と語っています。自身が手がけたものを「よいものだ」と褒められれば、素直にうれしいし、よくないところがあれば指摘してほしい、といった心情であったのではないのでしょうか。全く何の反応もない、というのが真澄にとつては一番寂しいことだったのかもしれません。

3 友人やその家族を心配する真澄

真澄が旅をする中で、多くの人に助けられ支えられてきたのは、真澄自身もまた関わった人々に対して深い思いやりを持って接してきたからではないでしょうか。書簡には、真澄が友人やその家族を心配する文言が綴られています。

大友直枝が眼病を患った際、病状を心配する真澄は、直枝に書簡を送り、必要であれば、目洗いの薬を用意するので申しつけて欲しいこと、そして目のただれに効果がある塗り薬を送るので、使つて欲しいことを伝えていきます。この塗り薬とは、真澄自らが製薬し、各地で診察した患者へも投薬したことが知られている「金花香油」のことです。

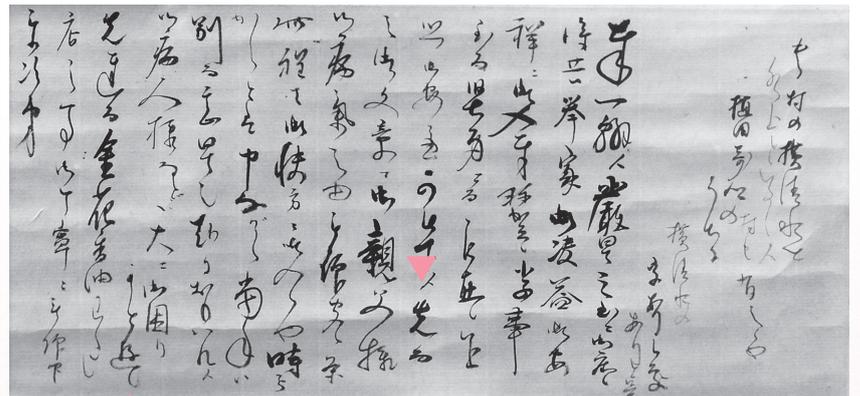
また小西宮太郎(今宿(現横手市雄物川町)の肝煎。真澄が地誌作成のため当地の巡村調査をした際に協力した人物)に宛てた書簡では、宮太郎の父親が病気を患っていることを知り、暑さの厳しい夏を迎え、いよいよ過ごしにくくなることを心配する言葉を寄せています。真澄は型通りの挨拶ではなく、友人やその家族を心配し、親身になって労わる言葉を書簡に認めています。そういった書簡の様子からは、心根の優しい真澄の姿が浮かび上がってきます。



文政2年(1819)4月16日付 大友直枝宛書簡(部分)【個人蔵】

翻 刻

一 此程御眼病
いかゞ御入候や。もしはまだ
相かはらず候はゞ、あら小薬
仰下されがし。一 此薬は
手製の油薬にて、大人
小人口中に入り候てもよろしく候。
眼のたゞれなど御ぬり可然候。



文政8年(1825)6月19日付 小西宮太郎宛書簡(部分)【館蔵】

翻 刻

先(達)脱(而)
之御文章ニ御親父様
御病氣之由被仰聞候条、
此程は御快方ニ被入候や。時分
からとは申ながら、当年は
別而甚暑之趣におもはれ候。
御病人様などは大三御困り
かと存し候。

第80回企画コーナー展

湯沢・雄勝
を記録する



秋田六郡誌(部分)

令和元年
10月19日(土) ~ 12月8日(日)

1 地誌での記録

真澄による地誌編纂は、文政七年(八二四)の平鹿郡から本格的に始まりますが、それに先だつて雄勝郡の地誌がまとめられました。しかし、整った形の清書本としては残されなかったため、内田武志による『菅江真澄全集』解題においては、私的にまとめられたいわば習作として位置づけられています。

全集に収められた『雪の出羽路雄勝郡』を見ていくと、『六郡郡邑記』を利用しながらもそれを徹底していないこと、各村の肝煎による組織だった協力を得ることがなかったことなどが指摘できることから、内田の考察を裏付けることができます。

各巻に記述された地域的な広がりを感じながら、同地誌と同時進行でまとめられた図絵集『勝地臨毫雄勝郡』全七冊を合わせてみていくと、地誌『雪の出羽路雄勝郡』も理解しやすくなります。

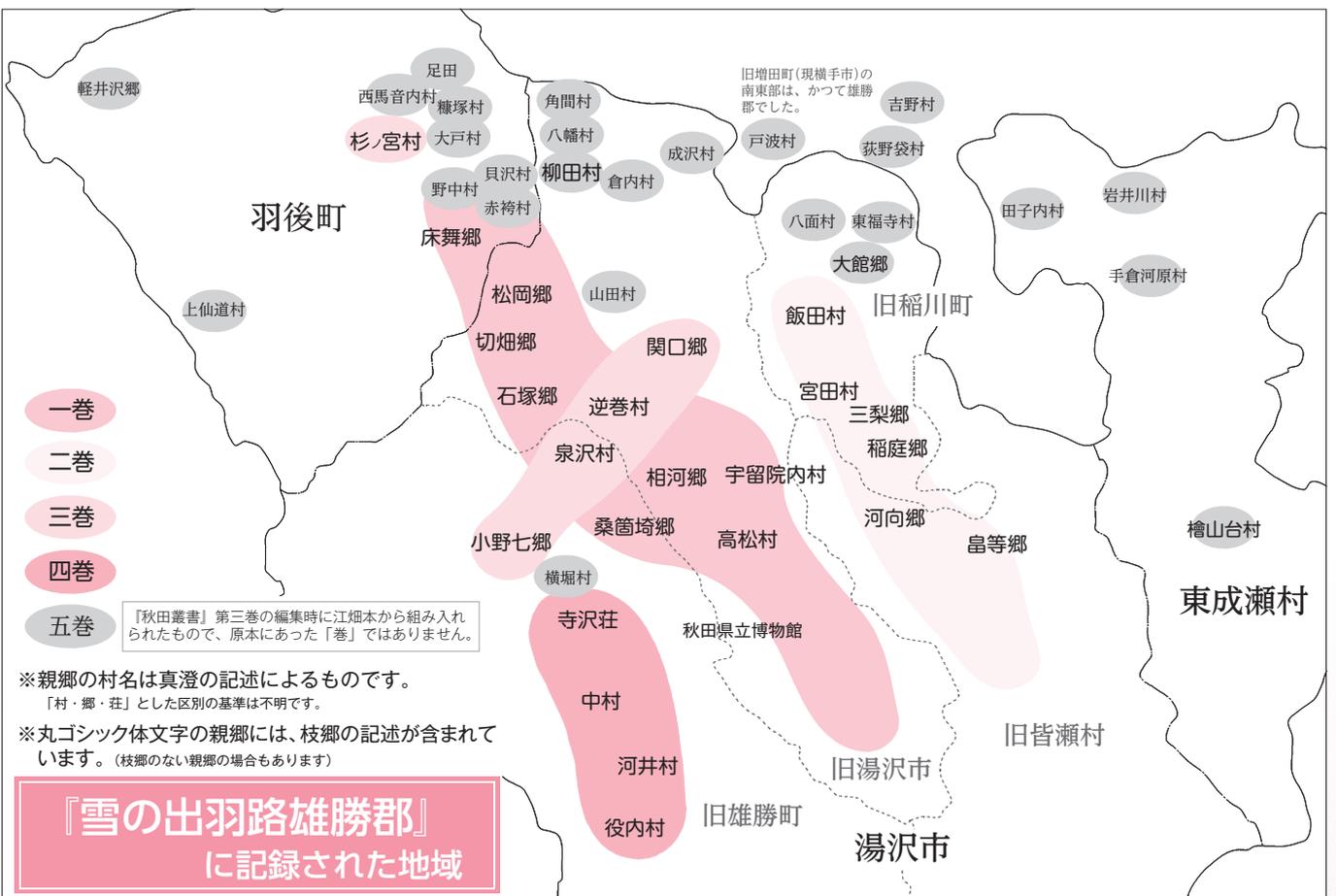
地誌『雪の出羽路雄勝郡』の特徴

『六郡郡邑記』を参考にしながら巡村調査がおこなわれたが、執筆手法が定まっていなかったため、平鹿郡や仙北郡の地誌に見られる「親郷」寄郷「枝郷」の村構成が把握しにくい。

後年の平鹿郡や仙北郡の地誌編纂で、真澄は「旧跡吟味役」として各村の肝煎による書き上げ文書を利用しているが、そのような組織だった協力はなかったようである。

など

文政年間におこなわれることになる平鹿郡及び仙北郡の地誌の習作で、私的にまとめられた。(全集解題で内田武志が指摘)



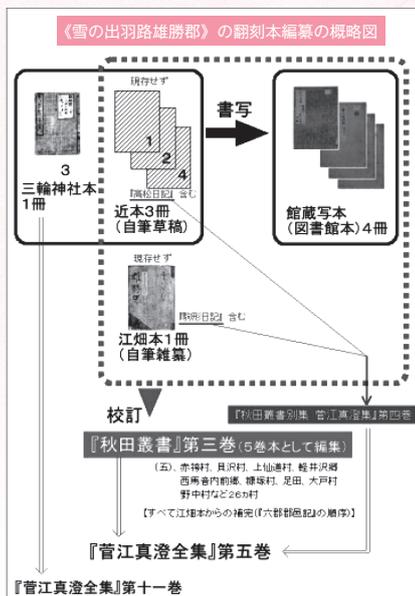
テキスト成立への理解

地誌『雪の出羽路雄勝郡』は、未来社『菅江真澄全集』第五巻に収録されています。私たちは、これを唯一のテキストとして読んでいます。

雄勝郡の地誌には、真澄による清書本が現存しないため、『菅江真澄全集』第五巻の底本となったのは、昭和四年に発行された『秋田叢書』第三巻です。これも、当時あった、近本三冊（自筆草稿）、県立秋田図書館蔵の写本四冊、江畑本一冊（自筆雑纂）を校合して編纂されたものです。中でも、『雪の出羽路雄勝郡五』というものは真澄の自筆本ではなく、第一巻〜第四巻までに書かれていない村落を江畑本から抽出してまとめたものです。

その後、羽後町三輪神社で『雪の出羽路雄勝郡三』に相当する真澄自筆の冊子が発見され、それが『菅江真澄全集』第十一巻に翻刻されることになりました。

このように、雄勝郡の地誌を読むには、翻刻本編纂の経緯について理解しておくことが必要です。

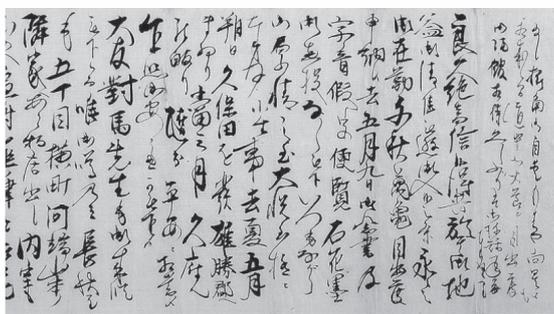


雄勝郡巡村調査の時期

たかはしきよこ

左に示した四月十日付高階貞房宛書簡から、雄勝郡の巡村調査が文化十一年（一八一四）五月〜文化十二年三月であったことがわかります。さらに、『雪の出羽路雄勝郡』の記述に文政年間の記述もあることから、本格的な地誌編纂を前にした文政五年（一八二二）頃にも雄勝郡を訪れたと考えられています。

真澄は本書簡で主に、雄勝郡巡村調査の内容を高階貞房に伝えています。貞房はこの時、藩主佐竹義種の参観のため江戸にいました。書簡の内容は、『雪の出羽路雄勝郡』と『勝地臨毫雄勝郡』の記録とも関わりがあります。



（写真中ほど十一行目から）

小生事去夏五月朔日、久保田を発雄勝郡へまゐり、当三月久府へ罷取り、随分平安三暮候。

高階貞房宛書簡内容と他の著作との関係

・雄勝郡松岡山（湯沢市松岡）で、白山蔵王権現の忌夜である五月四日夜（文化十一年）、例年出るという狐火を見た。↓『雄勝郡一』に「松岡の七不測」の一つとして記述する。

・六月は三十日ばかり、避暑と執筆のために杉宮（羽後町）で過ごした。この社（現在の三輪神社）は古く、別当寺などに伝わっているものが多い。↓『雄勝郡三』のおよそ半分以上の記述となっている。『勝地臨毫雄勝郡三』で宝物を描く。

・三輪神社宝物の中に、八方量の兜という直江兼統奉納のものがあるので、図示をする。↓『雄勝郡三』と『勝地臨毫雄勝郡三』にも記録するが、奉納者の記述がそれぞれに微妙に異なる。

・晩秋の頃、栗駒山に登って駒形根神社に詣で、奇談も聞いた。また、温泉神の旧地や広針山も訪ねて、城輪神に関する考察をおこなった。↓『勝地臨毫雄勝郡七』の図絵から駒形根神社に詣でたことがわかる。

・須川村の染屋に家蔵として、大石内蔵助の書、寺坂吉右衛門（四十七人目の赤穂浪士とされる）の薪受け取りの書面、水戸俊水（朱舜水、水戸藩招聘の儒学者）の書、古い『大和物語』があるので、参観交代の際に立ち寄ってみたい。もしよろしければ、殿様（佐竹義和）にも御覧いただきたい。↓『雄勝郡一』にも記述がある。渋谷善左衛門家のごとで、国守往来の休憩所であった。文化十二年は、佐竹義和最後の下国の年となった。

2 地誌中の日記での記録

日記のような記述がいくつも見られることが、雄勝郡の地誌の特徴となっています。それに加え、もともとの底本となった江畑本（自筆雑纂）に『駒形日記』、近本（自筆草稿）に『高松日記』という日記形式の記録が含まれていたことも特徴になっています。

3 随筆での記録

文化八年（一八一二）頃から、真澄は随筆を書き始めます。その中では、雄勝郡に関する事柄も話題になっています。雄勝郡に関しては、『久保田の落ち穂』八項目のほか、『筆のまにまに』に七項目、『花の真寒泉』に二項目、『桜がり下』に一項目あります。関連する他の著作と合わせて読んでみてください。

4 初期日記での記録

真澄が秋田藩領に入ったのは雄勝郡からでした。『秋田のかりね』と『小野のふるさと』がこの時期の日記として残っています。

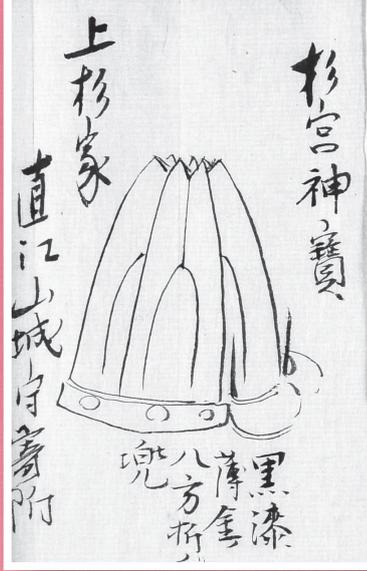
5 勝地臨毫での記録

地誌『雪の出羽路雄勝郡』との関連性が高いことから、地誌に添える図絵として同じ時期にまとめられたと考えられます。

四月十日 真澄

高階平吉様

杉宮神寶



(部分拡大)

表紙・裏表紙解説

表紙・裏表紙で紹介している資料は、真澄自筆の書簡、文化十二年四月十日付、高階真房宛書簡（館蔵）です。本紙四、五頁でも取り上げている「Letter from 真澄」展にて展示した資料の一つです。現在の羽後町三輪神社で、宝物を見る機会を得た真澄は、そこで直江兼続によって寄進されたという珍しい兜を目にします。そして、その兜の図絵をわざわざ書簡に描いて、真房に伝えていきます。歴史的な事柄に関心の高い真澄の人柄を物語る資料です。表紙・裏表紙を見開きにすれば、書簡全体の様子を見ることが出来ます。また本解説の右側には、書簡末尾に描かれた兜の図絵を部分拡大しました。

白紙に墨で書かれた手紙の一部分。右側には「高階真房宛」とある。手紙の内容は、真澄が直江兼続の遺品（神寶）を見たこと、そしてそれを真房に伝えることについて述べている。文中には「直江兼続の遺品」と「高階真房」などの言葉が見える。

手紙の続き。右側には「大石良雄」とある。この部分では、大石良雄の書簡や他の資料について言及している。文中には「大石良雄の書簡」と「大石良雄の書」などの言葉が見える。

編集後記

令和の時代が幕を開けた。新元号「令和」の出典は日本最古の歌集、万葉集。さらに掘り下げると、梅花の歌、三十二首の序文を典拠としており、元々の意味は「初春のよき（令き）月の、風やわかき（和き）中、梅の花を愛でる」といった内容になる。さて、万葉集への造詣が深く、梅の花を愛でた真澄がもし現代に生きていたら、この令和の新元号を一体どう感じただろうか。などといった具合に、何かにつけ、真澄に関連させて物事を考えるようになってきた、真澄担当三年目。個人的には「令和」の語感、音の響きが好ましく、いい元号かと。（角崎）

真澄

MASUMI No.37

発行日◎令和2年3月20日
編集・発行◎秋田県立博物館菅江真澄資料センター
〒010-0124 秋田市金足嶋崎字後山52
Tel.018-873-4121 (代)